



特集
1

そこにある、 SDG s を 見つける旅。

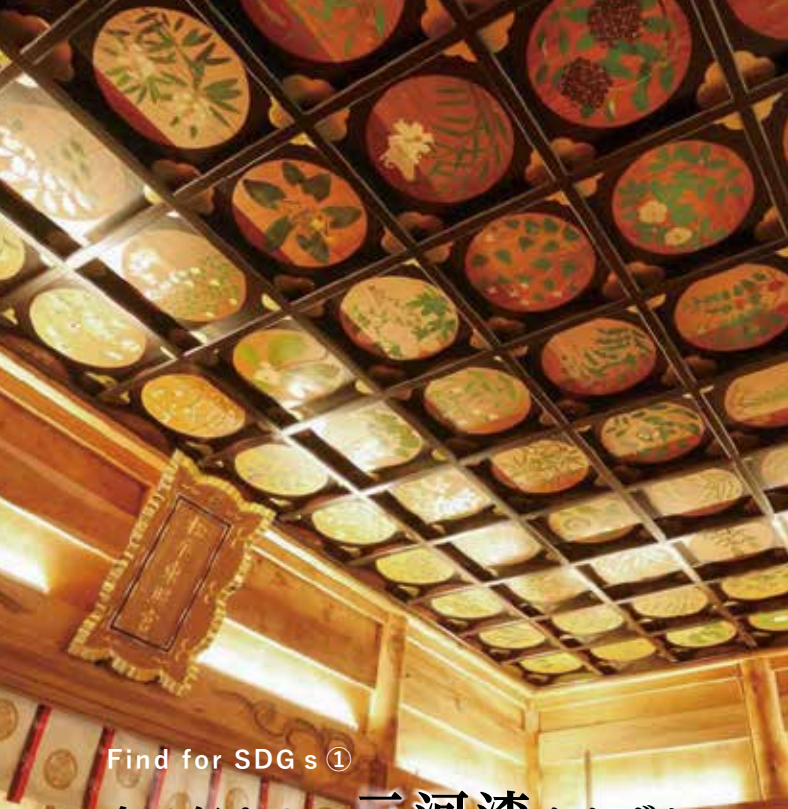
この愛すべき風景をいつまでも…。
そう願う人々の気持ちは今も昔も変わりません。
SDG s、ゼロカーボン、エシカルなどと聞くと、何やら新しいことのように感じますが、このまちで、今日まで続く人々の営みには、すでに多くのSDG sがありました。今、私たちが目指す「持続可能で、豊かな暮らし」とはどのようなものか。そのヒントを探ります。

豊かな自然 との暮らし

猿投山や矢作川をはじめ、市域にはたくさんの山や川があります。この地に住む人々は、豊かな自然の恩恵を受けながら暮らしを営んできました。自然との共生を図ることで、人々は豊かな暮らしを続けてきたのです。



挙母町俯瞰図(「産業のころも」)昭和15年(一部)



Find for SDGs ①

今は無き？ 三河漆をたずねる

漆とは 森林資源の中で、人との長い関わりを持ってきたものの1つが漆です。世界最古の漆を使った品は縄文時代の遺跡から見つかりました。今日でも、器などの日常道具や建築物の塗料など様々に使われています。独特の透明感があり、長く使うほど艶やかさを増す漆は、一度乾燥すると極めて固く、酸・熱・湿度に強い上、抗菌作用があるとされています。

かつての光景 市域山間部では古くからウルシの木が栽培されていました。「三河漆」と呼ばれるその漆は、かつて日本三大漆に数えられる（※諸説有り）ほど、良質なものとして有名でした。かの日光東照宮の造営時にも多く使われたといえます。また、戦国時代には徳川家康に仕えた松平家忠が三河漆を買い求めに人を派遣したことや、江戸時代には越前（福井県）から幾人もの職人が三河漆を買い求めに来たことを示す史料が残っています。

1本のウルシの木から採取できる樹液の量は、約200㍓とごくわずか。漆掻きと呼ばれる職人が、木の幹に1本ずつ切り傷を刻み、そこから滲み出る樹液の滴を丁寧に採り集めます。樹液は、人間で言う血液のようなもの。だからこそ、固まると大変に強固なのです。1本のウルシの木は、1シーズンでその樹液を採り尽くされ、その後、根元で伐採されます（※主な採取法）。しかしまた、根から萌芽が発生し、十数年かけて樹液が採れる木へと成長するのです。採れた漆は精製され、それぞれの職人の手へと渡っていきます。かつてはそんな光景が市域でもありました。

未だ残るもの 戦後、化学塗料の台頭などによって漆の需要は低迷し、いつしか漆掻きをする人も、山に育つウルシの木も見られなくなりました。現在、日本で使われる漆のほとんどが外国産のもの。しかし、漆の文化は未だ市域にも残っています。小原和紙工芸の指導者として知られる藤井達吉が昭和初頭に三河漆の素晴らしさに着目したのをきっかけとして、後に小原や足助で独自の漆工芸の技法が生み出されました。達吉の意思を継ぐ漆芸家は現在も市域で活動しています。数年前、小原地区では漆文化の継承を願い、ウルシの木々が植えられました。果たしてこの先、樹液の採れる木へと成長するのか。自然との付き合い方の模索は続きます。



- ① | ②
- ③
- ④—
- ⑤—
- ⑥

①平成27年に徳川家康公没後400年の記念で描かれた松平東照宮の天井画。小原地区の安藤則義氏が漆絵を施した ②漆掻きの様子 ③漆の付着する中世の出土品（大貝津遺跡） ④藤井達吉に師事した足助乾漆作家・故高山兼男氏とその作品 ⑤小原地区の漆芸家・安藤源一郎氏（①則義氏の子）とその作品 ⑥小原地区で植樹されたウルシの木



Find for SDGs ②

衣のまちをたずねる

木綿から生糸へ

クルマのまち、豊田市。かつてここは、衣のまちでした。その歴史は、まず木綿から始まります。

木綿とは、植物の実である綿花から糸を紡ぎ、織ってできる布生地のこと。三河は、インドから日本に初めて木綿が伝来した、木綿発祥の地とされています。三河産の木綿を使った織物類は「三河木綿」として古くから有名で、中でも挙母は、良質な綿の産地でした。特徴は、精白な糸で高密度に織り締められた丈夫な生地感。江戸時代には、遠く江戸の市場でも流通していたそうです。明治期に入ると、ある発明家が作った「ガラ紡」という糸紡ぎの機械が、市域(特に松平)で画期的な進化を遂げます。それは、豊富な川の水量と急流を生かした「水車」を動力としたこと。これにより量産化が進み、綿紡績業は急速に発展しました。その後インド・中国産の綿に押され、三河の綿栽培は衰退の兆しをみせるようになりますが、明治20年代からは養蚕業が盛んになり、それまで綿を作付けしていた畑が桑畑に転換されるようになりました。挙母のまちは、繭(生糸)においてもまた、全国有数の産地として発展したのです。稲武では、名家である古橋家が養蚕業を奨励したことで、養蚕製糸業がとて盛んでした。伊勢神宮の由緒ある祭礼のために、明治15年(1882)から今日まで、生糸を毎年献納し続けています。また、天皇陛下が代替わりする際の大嘗祭に奉納される絹織物にも、稲武の生糸が使われており、赤引糸と呼ばれる三河産の生糸は最高品質のものとして全国に知られています。

衣服の価値

個人の暮らしにおいて、衣服は近い距離にあるものでした。昔はどの家でも綿を栽培し、普段の衣服や仕事着は自家製の木綿で賄っていました。自分で作るから、直すことも自分でできる。衣服は繕いながら着続け、あるいは雑巾など別の形で使い続けるものでした。また当時、養蚕業は一家総出の仕事でした。子どもでも蚕へのエサ(桑の葉)やりなどをします。桑の葉が温かくなりすぎないように水を掛けながらほぐしたり、蚕は濡れた桑の葉を嫌うので、与える直前に桑についた水を拭き取ったりと様々な苦労があったといいます。そうして作られる衣服の価値を知っているからこそ、大事に使い続けるという意識を、人々は自然と持っていたのかもしれない。



- ①
- ②
- ③④
- ⑤⑥

①手織りの様子とその作品(民芸館の挙母木綿の講座) ②古くから国内で栽培された和綿 ③市域で使用されていたガラ紡 ④ガラ紡の大きな動力となった水車※豊田市博物館で展示予定 ⑤蚕による繭玉 ⑥高品質な三河の赤引糸 (⑤⑥出典:古橋会)



Action for SDGs

今、進めている 衣服循環 という取組

大きな問題 現代では、既製服の多様化・個性化が進み、また手頃な価格の「ファストファッション」が台頭するなど誰もが様々な服装を楽しめるようになりました。しかし一方で、深刻な問題も生じています。国連貿易開発会議(UNCTAD)は「世界の環境汚染産業」として石油産業に次ぐワースト2位にアパレル産業を挙げました。国際化が進んだ今、日々大量の衣服が作られては捨てられています。その過程で多くの石油や化学薬品などが使用され、CO₂やごみが排出されているのです。

豊田市では、集団回収や各所に設置しているリサイクルステーションで、家庭で不要になった古布（衣服として再利用できるもの）を回収しています。回収された古布は、リサイクル工場で選別後、衣服を必要としている海外の地域へ送られるなど再利用が図られています。しかしながら、環境省の調べによれば、ごみに出される衣服（年間約50万ト）の95%が廃棄され、再資源化される衣服はわずか5%といえます。

試み そこで市は、新たな取組として、衣服が資源として経済的に循環する仕組みづくりに向けた実証事業に取り組んでいます。この取組は、家庭から出される古布のほか、工場で廃棄されるユニフォームなどを、市内事業所での選別・搬送を経て、協力事業者がケミカルリサイクル※など様々な方法で再資源化（製品化）するというものです。衣服循環の仕組みをつくることは簡単なことではありませんが、他市に先駆け、「ミライのフツー」に向けて取組を進めています。

※ケミカルリサイクル…使用済みの資源を化学的に分解し、原料に変える方法



●衣服循環の実証実験やエコフルタウンに関する問合せ
 /未来都市推進課(☎34・6982、FAX32・3794、✉hybrid-city@city.toyota.aichi.jp)



SDGsの発信拠点は とよたエコフルタウンから 博物館へ

市が平成21年に環境モデル都市に選定されたことを受け、平成24年に開館した「とよたエコフルタウン」。太陽光発電・蓄電池などを組み合わせたスマートハウスや水素ステーションなど多くの環境技術が展示され、低炭素な暮らしを体験できる当施設には、これまでに121の国・地域から約40万人が来館しました。そして現在、当時最先端であったこれらの環境技術の多くは、生活の中で実用化されています。博物館が4月26日(金)に開館することに伴い、エコフルタウンは3月31日(日)をもって閉館し、SDGsに関する取組の紹介など一部の機能を博物館に移転します。

イベントのご案内



3月16日(土)午前10時～午後3時

- ▶ 来館者40万人達成(予定)記念！
サンクス菓子まき
- ▶ 目指せ低炭素博士！エネルギークイズラリー
- ▶ エコフルモビリティ 実車de年表
- ▶ Play! SDGs
パートナー企業によるブース出展
- ▶ おいしく食べきり！食ロスゼロフードコーナー
など

ものづくりって、楽しい!



「クルマづくり究めるプロジェクト」参加者

主な活動

小・中学生や高校生が、実習を通じて塗装やエンジンなどのクルマの知識、部品を修復する技術を身につけます。理想のクルマについての研究もします。10年間で延べ971人が活動しています。



さとう けいじ
参加者 佐藤 慶治さん(中学3年生)

佐藤さんのこれまでの活動内容は?

エンジンを学ぶ活動では、分解し部品を観察することで構造を理解し、故障の原因を見つけ修復する技術を磨きました。デザインコースに進み、山道に強い馬力のある車をつくろうとタイヤや車高について研究しました。

佐藤さんにとって、究める楽しさとは?

活動に参加した5年間でクルマに関する多くの知識や技術を習得しました。部品が動かない原因を考え、試行錯誤を重ねて自分の手で修復することがクルマづくりを究める楽しさです。指導員の技術を吸収し究めることで、将来、理想のクルマをつくりたいです。



「クルマづくり究めるプロジェクト」は3月で終了。5月から新たに…

「^{こうば}丘KOBAPROJECT」が始動! 未来のモビリティをつくります!

子どもと自動車関連企業で働くプロとでつくる4チームをそれぞれ会社に見立てて、4人の社長が考える世の中にまだ存在していないモビリティの製作にチームで挑戦します。小さな町工場ですべて社員一丸となつて一つのものを作り上げるように、ソーラーパネルを搭載したモビリティや、災害時に人を運ぶモビリティなどの未来のモビリティを、皆で協力して生み出す活動です。



詳細はこちら▲

自分で、あるいは皆で協力してものをつくり上げる達成感。つくったものを使う喜び。そういったものづくりの様々な楽しさを感じたことがある人は多いのではないのでしょうか。豊田市には、ものづくりの楽しさに魅せられ、ものづくりを究め続ける人、伝え共有する人が多くいます。

●問合せ ものづくりサポートセンター
(☎47・1260、FAX47・1262、✉monozukuri@city.toyota.aichi.jp)



伝える楽しさ

子どもたちにもものづくりの魅力を伝えて興味・関心をもってもらうことに、楽しさややりがいを感じている人たちがいます！



ものづくりサポーター

主な活動

市内の小学校へ講師として出向き、「竹とんぼ」「和風」「シャボン玉」などをつくる授業でもものづくりの楽しさを伝えていきます。今年度は、70校で約3,000人の児童に授業を行っています。



いしだ ひでお
ものづくりサポーター 石田 英雄さん

石田さんが実施する授業の内容は？

「竹とんぼ」製作です。竹を羽根の形に削りますが、ナイフを初めて使う子が多く、丁寧に教えています。やすりをかけた羽根を火であぶってひねりを加え、軸をつけて完成。「よく飛ばすにはバランスが大切だ」と伝えます。

石田さんにとって、伝える楽しさとは？

「初めて作った」「高く飛ばせた」と子どもが喜ぶ様子からものづくりの楽しさを共有できたと感じ取れることが、伝える楽しさです。楽しんでもらうだけでなく学んでもらうことも大切にしている、竹とんぼがなぜ飛ぶのか、共に考える楽しみもあります。



ものづくりが好き！子どもたちのために活動したい！という皆さん

「ものづくりサポーター」になりませんか？

研修会があるので、安心して活動できます！

申込み／随時、登録申込書を郵送、ファックス、Eメールか直接ものづくりサポートセンター
(〒471・0023、拳母町2-1-1、FAX47・1262、✉monozukuri@city.toyota.aichi.jp)

※登録申込書は交流館などで配布。市ホームページからダウンロード可



詳細はこちら▲